元気からだ！Q&A

注意欠陥／多動性障害（ADHD）について

千葉県医師会広報・ホームページ委員会
鶴岡 義明 医師

Q ADHDってどんな病気なの？

A 文部科学省の定義※によると、注意欠陥／多動性障害（ADHD）とは行動に障害がみられる発達障害の一種です。不注意、多動性、衝動性などの症状が小児期から現われ社会的活動や学業に支障を生じる事があります。大人になっても症状が続く場合もあります。

Q どんな症状がでるの？

A

「不注意の症状」

- うっかりミスが多い
- 勉強に集中できず気が散りやすい
- 話をしっかり聞けない
- 作業が雑
- 計画性に乏しく段取りが悪い
- 整理整頓が苦手
- 忘れ物が多い
- 約束や期限を守れない

「多動性の症状」

- 落ち着かず手足を常に動かしている
- 授業中に、席にじっと座っていられない、歩き回る
- しゃべり続ける
- 行動が次々と変わる

「衝動性の症状」

- 順番を待つことが出来ない
- 思っている事をすぐ口に出してしまう
- 他人の会話に割り込む
- 問いかけ終わる前に答えてしまう
- 脈絡なく唐突に行動を始める

Q 何科を受診すればいいの？

A 精神科です。広汎性発達障害、統合失調症、双極性障害、気分障害、不安障害、解離性障害、境界性パーソナリティー障害などの精神障害との鑑別が必要です。若年者を得意とする精神科専門医を受診する事を推奨します。若年者を専門とする精神科医は少ないので、専門医を見つけられない場合は、近隣の精神科クリニックを受診し、紹介して貰うという方法もあります。初診の際に、小児は患者本人に問診する事が困難なため、保護者など普段近くで様子を見ている方から本人の行動を聞きます。幼稚園、保育園、小学校などでの保護者が現場で見る事のできない行動障害は、教師から事前に書類にしてもらうと、担当医師に伝わりやすいと思います。

Q 治療方法は？

A 通院精神療法と薬物療法が主です。注意欠陥／多動性障害は100年以上も前から知られている疾患ですが、効果的な薬物が分かったのは最近です。成長期にある若年者への薬物投与となるので、除外診断、確定診断、重症度評価を適切に行い、適応を慎重に検討されなければなりません。また、併存障害が多くみられるため、必要に応じて抗うつ薬や抗精神病薬、気分安定薬、抗てんかん薬、抗不安薬を使用する場合があります。

注）世間一般にいう「大人の ADHD」とは、大人になってから発症するのではなく、先天性の障害が大人になってから発覚したものをいいます。

※ 文部科学省ホームページ（学習障害（LD）、注意欠陥／多動性障害（ADHD）及び高機能自閉症について）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1396626.htm